博士論文審査及び最終試験の結果

学位請求者　　小松原由理
学位請求論文　＜フォトモンタージュ＞の可能性
　　―ラウール・ハウスマンにおける「ベルリン・ダダ」―

審査委員（主査）谷川道子

《審査の結論》

小松原由理氏から提出された博士学位請求論文「＜フォトモンタージュ＞の可能性―ラウール・ハウスマンにおける『ベルリン・ダダ』―」について、書面による各委員の事前評価を基に、２回の論文審査委員会と口述による最終試験をおこない、その結果、審査委員会は全員一致して、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるという結論に達した。

なお審査委員会は申請者の論文指導教員であるドイツ語圏表象文化が専門の谷川道子を主査に、副査として本学から、副指導教員である、ロシア・アヴァンギャルド研究でも第一人者の亀山郁夫教授と、現代イギリスを中心とする芸術・批評理論がご専門の鈴木聡教授、修士論文から相談にのって頂いたポーランドを中心とする東欧現代文化全般にお詳しい関口時正教授、そしてドイツ現代思想・文化がご専門の山口裕之教授の５名で構成された。

《論文の概要》

第１章は、これまでさまざまな「ベルリン・ダダ」像を生み出してきた言説の歴史を振り返りつつ、そこにつきまとう「政治性」の意味を読み解きながら、焦点を中心的な芸術技法である「フォトモンタージュ」に絞り込み、しかしそこが、後にグロスやハートフィールドが展開するような「モンタージュ的思考」に基づく「政治的フォトモンタージュ」と、ハウスマンによる「コラージュ的思考」に基づく「フォトモンタージュ」という両極の思考法を誕生させた場でもあったことを、明らかにさせていく。

第２章は、グロスをハウスマンのカウンターパートとしつつ、両者の風刺性の意味を生と作品から解き明かしていく。グロスの風刺はダダイストとしてのパフォーマンスと結び付けられ、「オイディプス人間」を自称するグロスの「悲劇」は、アンチテーゼとしての統一像を志向する「モンタージュ的思考」によって用意された、典型的な宿命だったともいえる。対して中心の喪失を基本原則とするハウスマンの「風刺」は、作品《マ

シーン頭》に見るように、「風刺」する自らへの「嘲笑」という身振りをたえず挿入する意図からも読み取れるように、喜劇的な趣きを持つ。この悲劇と喜劇という両者の「風刺」をめぐる意図の違いを際立たせることによって、＜フォトモンタージュ＞という原理が要求する、双方向のベクトルを持ったベルリン・ダダ本来の姿に迫ろうとする。

第３章は、そういう「コラージュ的思考」を遵守するラウール・ハウスマン(1886～1971)が、ベルリン・ダダという運動において、具体的にどのような造形を生み出したかに向けられる。ハウスマンとヘーヒの両性のコンビによる共同制作、視覚音声詩、オプトフォン、リズム／ダンスなどの実験が、「性」と「言葉」の二つの分析格子を用いて分析され、「フォトモンタージュ」のジャンル横断的な可能性についても論議される。ここではハウスマン自身の伝記的側面や時代背景そのものにも記述が及び、作品の時代的かつ芸術家自身の内面的なコンテクストが切り結びつつ、彼にとって作品は、＜ずれ＞の生成する場であり、それを「コラージュ的思考」で並存させる広範囲な＜言葉＝かたち＞の追求の場であったことが考察される。この展開においてハウスマンは、造形芸術の「言葉の運動体」としての局面を、「世界との交信」という行為へと拓いていく。

第４章は、「ベルリン・ダダ」という運動が終焉した後のハウスマンが、「コラージュ的思考」をどのように展開させていったかに焦点をあてる。考察の対象とされるのは、ギリシア語で質料ないし素材を意味する「ヒュレー」をタイトルとした小説『ヒュレー』（1926 年に執筆開始され戦中に書き継がれるも未完・未刊行）と、＜わたし＞を見るまなざしとしてのカメラの目、「メラノグラフィー」との関連である。ここにおいてハウスマンは、＜わたし＞をめぐる世界と神話的世界を交錯させ、物語＝世界が誕生・生成する源＝原点にまで視点を遡らせる。そうすることによって、「神話」を模倣するのではなく、＜わたし＞の＜かたち＞が最初に生成される源＝現場へと立ち戻り、物語と世界をゼロ地点から＜フォトモンタージュ＞していくという法＝原理を適用させようと試みているのだ、と結論付ける。

第５章は、晩年の小説『変革』（1963 年刊行）をとりあげ、＜わたし＞の＜かたち＞は絶えず「変容」するという、エクリチュールに対してハウスマンが託した「変革」の問題を明らかにするとともに、「読者」に対しても「変革」を要請する姿勢は、1950-60 年代に登場したウィーン・グループを核とする「ネオ・アヴァンギャルド」運動において 20 年代の「アヴァンギャルド」が無批判に復興していく受容状況に、ハウスマンが掲げた警句とも重なっていく。つまり、「ネオ・アヴァンギャルド」や「ネオ・ダダ」と呼ばれる新たな世代の芸術家たちとの交流が、最初は理解しようとして始まったのに、次第に彼らを模倣者として糾弾するようになっていった、その根底には、予定調和の構築ではなく、たえざる＜ずれ＞としての「変革／脱構築」を求めるハウスマンの＜フォ

トモンタージュ＞という芸術原理があったからだ、といえるだろう。「変革」は、最終的にはハウスマンが自らに課した「生き方」として解釈できる。彼の最晩年の造形作品で、自分自身を切り裂く「デ・コラージュ」という手法が選択されたのは、＜コラージュ的思考＞が用意した一つの帰結としても、読み解くことができるのではないか。

《審査の概要および評価》

審査において高い評価が与えられたのは、以下の点である。

１）「ベルリン・ダダ」を従来のようにグロスやハートフィールドの政治的な側面からだけでなく、ハウスマンの自己風刺的な側面から逆照射して位置づけなおそうという試みは、ベルリン・ダダを、歴史的な存在現象としてだけでなく、＜フォトモンタージュ＞という芸術技法／思考原理の面からも考察し直し、さらには５０～６０年代の「ネオ・アヴァンギャルド」にまで通底させて捉えようという、新たな地平へと切り拓く契機＝アプローチになりえている。

２）対象に関しては詳細な叙述と分析がなされており、全体として本論文は、「ベルリン・ダダ」に関してのみならず、日本ではまだ殆ど知られていないラウール・ハウスマンに関しての、具体的作品や事項を十分に踏まえた、数少ない貴重なモノグラフィーとなっており、その意味でも、高い評価を受けることができよう。

３）未刊行の『ヒュレー』や『変革』（未邦訳）といった、ダダ研究者やハウスマン研究者においてもほとんど言及されることのない作品を取り上げて詳細に論じているという点でも、この論文の意味は大きい。博士論文に求められるひとつの重要な要件を満たしているといえる。

４）研究対象を「ベルリン・ダダ」だけでなく、ヨーロッパ文化内に通時的・共時的に位置づけ、評価する上で必要な歴史的知識や人文学に関する知識も偏りがなく、包括的で充分であると思われる。全体として叙述は論理的かつ明快で、論文として均衡が取れている。文章もスピード感にあふれ、達者である。

他方、いくつかの疑問点も提起された。

１）緻密に見ていけば、各章の構成はいまひとつ断片的で、全体として一つの論を形成する構成と力に多少欠けるところもないわけではない。いくぶん生硬さが目立つ文体や表現、事象的なことに入り込むあまり理論的連関が見えにくくなる点、対象や文献に対するいくぶん素朴な関わり方、といったことなども、申請者の若さゆえともとれるが、今後の進展において進歩が見られることを期待したい。

２）論文が最終的に達している主張は、副題も含めた表題の示す範疇を超えているよ

うに思われるが、これは欠点とはいえないものの、公刊する際には、改題を考えてみてもよいのではないか。
3）＜フォトモンタージュ＞や＜コラージュ＞、＜モンタージュ＞、＜アッサンブラージュ＞等々の技法に関してや、「共感覚」や「視ること」、「鏡」などの用語に関しても、概念規定の曖昧さなど、まだ不十分な点はある。しかし、これらは研鑽を積んで成熟していけばおのずと解決され、研究者としての今後の活躍は期待しえる。

以上の評価すべき点および疑問点については、口述試験において学位申請者からも補足的な説明をうけ、その理解や受け答えも適切であり、最終的に審査員が審議した結果、本論文は博士（学術）の学位に値するのみならず、今後の研究の将来性についても十分に期待が抱けるという認識で、委員会は一致した。